

THE
JAPAN
INTERIOR
DESIGNERS'
ASSOCIATION

JID

no. 55

1972. March 20th.

昭和 47 年 3 月 20 日発行

目 次

'72 インテリア展特集	
もっと意欲的提案を 豊口克平	1
作品展写真	2
ゲストの声	4
会員の声	8
'72 インテリア展経過報告	11
講演	
環境とそのトータルデザイン 白石勝彦	13
かるてっと	17
賛助会員紹介, 編集後記	18

'72インテリア展に—もっと意欲的提案を—

豊 口 克 平

44年度の協会関西支部主催の第1回展とこの度の46年度第2回展を対象してその成果を私達はどのように評価すべきであろうか。2年を経過しているが、その間社会の様相の変貌は激しく、特に〈住居〉〈インテリア〉に対する社会的認識や国民的理解も大きく進展したことは事実である。また一方専門家としてのインテリア・デザイナーの造形的意欲の上でひどく海外からの影響が大きく見られる。例えば経済的な意味性の大きい量産、方式、技術的な立場からのプレファブ、ノックダウン、新材料活用としてのプラスチックの成型などの基本方式が人間の心理的立場から新しい空間機能として新しい発想を創り上げようとする勇敢な試みが示されたことである。特にそれはイタリアにおいて大きな躍動が見られる。

このような意欲的な興味ある作品と人間の本来の〈住生活〉とどのように

実際的にかかり合いを持つかはまだ不明である。しかし新しい試みとゆうものは常に反逆的であり、造反的であるところに価値があるわけで、何等の問題をも提起しない展覧会とゆうものは意味のないものであろう。

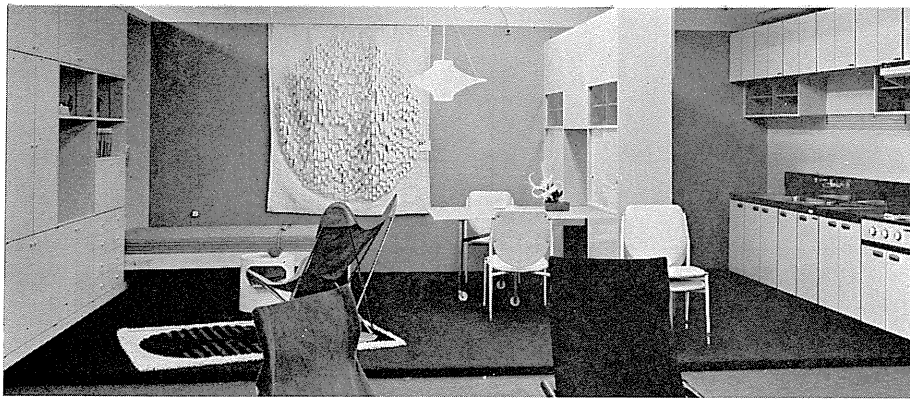
そのような意味で第1回は堅実な作品の集積が強く示され、第2回は新しい提案を試みた意欲的な展覧会であったといえよう。しかしこの新しい提案は単なる珍奇な空間の創出であり、芸術的空間への試みであってはならないであろう。人間の〈住いとしての空間〉の意味性との強いつながりが観者に理解されなければならない。その点でいささか展覧会のための作品としか受けとれなかったものもあったのではなかろうか。

しかし多くのものはそれぞれの立場からの新提案がなされていたことである。その造形上の形、色彩、全体空間などフレッシュな雰囲気をかもし観者

の多くに興味と関心を与えた点まことに成功だったと思う。しかし厳しい今日の庶民の〈住い〉〈これからの住宅産業のあり方〉に対してもっと力強い〈明日へのインテリア〉を可成り現実性をもって示す提案がもっとあるべきではなかったろうか。社会的な立場から私達の最も大きな責任として。

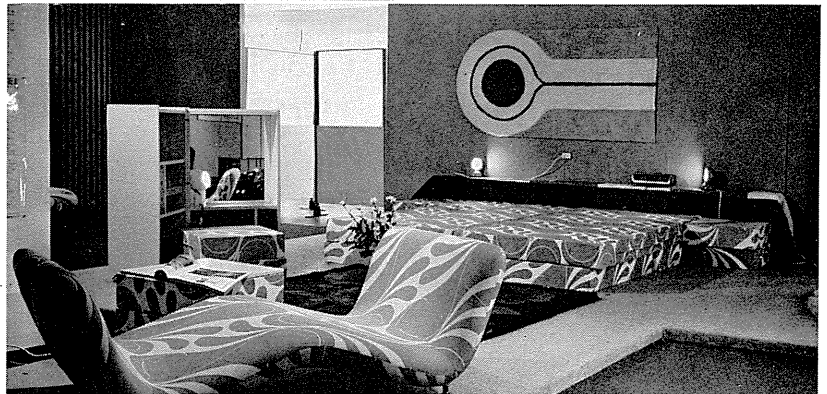
さらに欲をいえばもっと広く、高さ(空間を感じさせる)をもつ会場で、もっと多くの会員参加者によってその質と量を誇りたかったと思う。文句をいわずに実行し行動することである。

関西支部の会員岡村氏の実行計画、富田会員の会場計画への犠牲的奉仕の努力には敬服と感謝の心で一杯である。また会場を貸与下さった阪神デパートの社長はじめ関係の皆さまの御厚情、展覧会出品、展示にあたって御協力下さった協力会員やメーカーの方々に心からの感謝を申述べる次第である。(理事長)

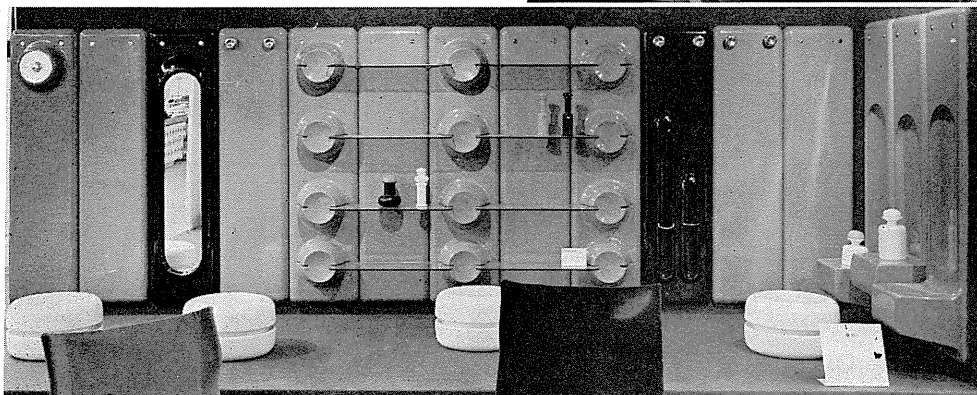


上野 忠之
山下 捷台
◀ 岡村 実
山口勇次郎
本田 安治

並川 拓史 ▶
本田 安治



◀ 加藤 礼三
迎井 夏樹

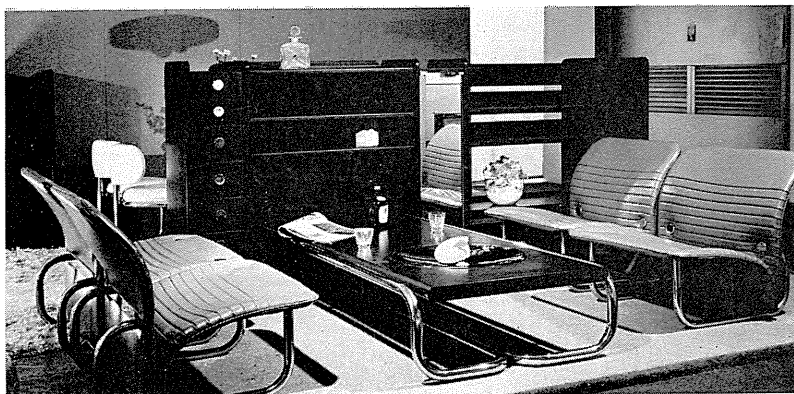


富田 卓司 ▶



◀ 中村 圭介
山岸 枢史
山口 通夫

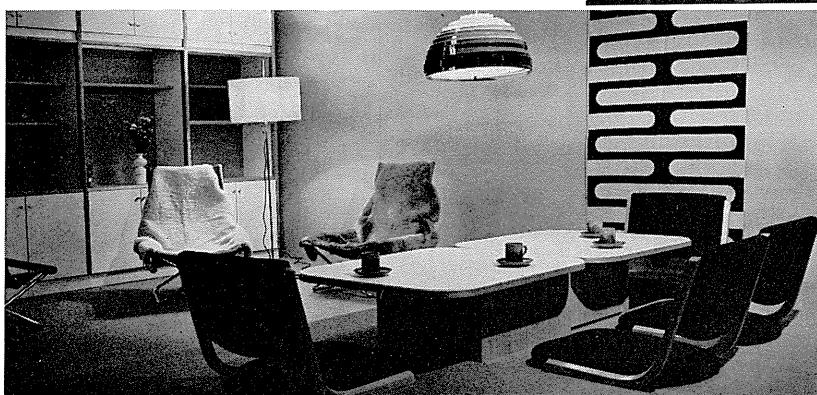




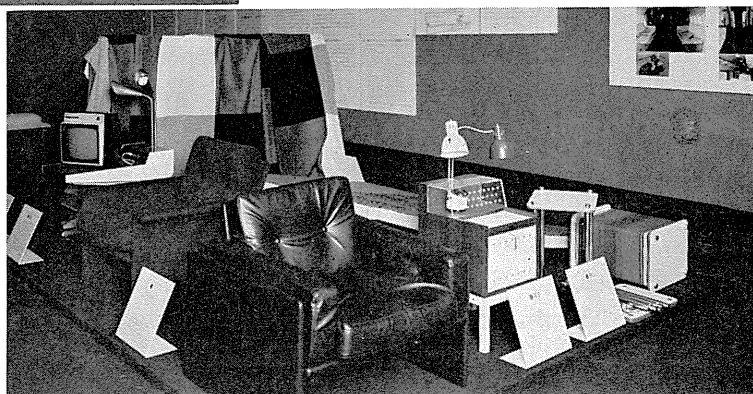
福岡喜久雄 ▶
山口 道夫



◀ 豊口 克平
新居 猛
山口 道夫



吉永 淳 ▶
川崎 浩
松本 政雄
山口 道夫
上辻 謹一
石川 四郎
南原 七郎
浅野 正道



◀ 協賛会員コーナー



“72インテリア展” 随想

我 妻 栄

先づ“うちがわからの提案、というサブテーマに心を引かれました。ということ、現在の環境づくりには正しい方向とか健全性とか楽しさなどが要求されると同時に、空間とか経済性とか機能的なものに可成り大きい制約があるからで、これらの条件に立ち向ってゆく具体的な仕事と提案に期待したからだと思います。

事実、いくつかの提案には共感するものがありましたし、展覧会としての成功は素直に認められます。全体に暗すぎる会場、混雑した作品展示など、ホッとした息抜きのスペースが欲しかったと思いますが、これにはいろいろ理由もあることでしょう。ひとつ、ふたつのマイナス面をおぎなうに十分な出品作品の意欲を買うことができたのは慥かです。

つい先日、ある会合で照明についてのひとつの提案があったのですが、現在のような多種多様な器具のはんらんの中で企業は益々多品種少量生産に追いこまれ、消費者は撰択に迷う結果になりつつありますし、自分達がいくつかの形を考えてみてもサバクのアリに似た仕事でしかないというのです。それよりも、従来の観念からはなれた住環境での照明の在り方に新しい方向づけができないだろうか。例えば面照明とか映像照明としての新しいシステムの上に立った考え方が将来の照明装置として浮びあがってきているのではないかというのです。

照明は勿論インテリアの仕事の中で大きい役割を果す部分であるに違いないと思いますが、主体性を持って考えられていない場合が多かったようです。どうしても家具という道具が中心的な存在になり、照明は、極言すればアクセサリーであったと言えましょう。

照明関係の会合での面とか映像照明の提案は従属的な考え方ではなくインテリアの装置として最初から計画されるべきであると言っているのです。そしてその時代が来るのも近いようです。

百貨店での展覧会場ディスプレイでは制約が多過ぎて、とうてい理想的な照明環境をつくりあげることは困難だと思います。ですから生活環境としての生活的というのではなく、展示効果としての役割を明確にして差しつかえないと思います。そうでないと必ずどこかに無理がでて誤解されないとも限りません。

極論家に云わせると（インテリアの理想は土地を解決してからだ）と云っています。或る意味では実感として受けとられますが、一方では非常にエリート的な理念の上に立っているのではないかと思われます。30坪の土地に25坪の二階建築をして分譲価格が800万というダイレクトメールや新聞の折込が毎日何枚となく配達されています。そしてこれが現在の私達のまわりを取りまいて大部分の大衆のささやかな理想であるようです。この小さな建築の中にも憩いの場が欲しいでしょうし、食事と寝る場も必要に違いありません。展示品の中にU氏とO氏の合作で、（人間の豊かな生活は食べる。憩うことから はじまります。18m²の空間を4m²の厨房と14m²の居間兼食堂とし、食事が済めば、その一室は完全に居間となる）というアイデアで、U氏の流し台セット、吊棚、間仕切り戸棚、O氏の寝台付収納ユニット、Y氏の小椅子、スツールなどが組合はされていたものに、新しい方向が発見されるような気がしました。

また、K氏とM氏の（壁面からの思わぬ突起、それがそのままひとつの生活の機能を満たす壁面家具）の提案も面白いと思いました。プレハブは勿論

量産建築の収納家具の壁面内への装置は、これから当然取りあげられる形態です。実用性収納用具は建築壁面に吸収される時に来ました。ここで、照明装置も企画の段階から参加しなければならないと思います。装飾性収納家具はインテリアの、というより、生活のひとつのうらほいとして必要性を持ってくることも、一方ではおこりつつある筈です。と同時に小道具的な家具の存在が要求されつつあります。

その点、M氏の（人間はだれしも自由でありたいと願っています。その人間に対応してゆくには生活道具にも自由な要素が必要だと思います。このくつろぎの座は、やすらぎ、対話、ひろがり、核、共存など）という考え方にも共感が持たれました。量産材料でのバリエーションの取り方は大変むずかしいものですし、無駄なものも出来る場合が多いのですが、よくまとめていましたし、これからの方向付けとして貴重な提案だと思います。

T氏の（コマーシャルイズムに踊らされないようにしよう。）という考えは正しいですし、今後とも押し進めてもらいたいものですが、ただ自慰的なものであって欲しくないと思います。

T氏の（座と椅子生活形態の融合と調和）のテーマも現在としては当然のことで、私達の生活環境は、いや応なしにそれを強いられるし、若い人達には当然な状態ではあると思いますが、いつまでも椅子という従来の腰掛けに依存しなければならないかという疑問もわいてきます。

とにかく展示会のサブテーマである“うちがわからの提案、は誰に遠慮もいらない会員自身の頭と血からのものであって、その主張を社会がいつ取りあげてくれるかは、あまり期待していません」と云っては嘘になるでしょうか。

知識産業時代、脱工業化時代と云わ

れている現時点でのインテリアの考え方を、ここで明確に方向づけることは困難ですが、大きく変革しようとしている生活環境の中に順応することのできるインテリアの巾が欲しいものです。建築との有機的な関連性、エクステリア、ハウジングなどの仕事とのつながりが理念的にでも持たれていることが好ましいように思いますし、私達自身の生活環境がつくりものの中だけで息をすることが益々つらくなって来ているからです。年末に開店した大阪の虹のまちと三番街の所謂カラクリを見ていると、参加している大衆自身が熱帯魚か玩具の人形に見えます。

量産より個性の時代、人間性回復の時代、レジャー時代と云われながら、それを実行するためにまた機械とコンピューターの厄介にならなければならないのですから、せめてインテリアの世界では人間が人間性を造り出して欲しいものです。

(財)大阪デザインセンター 常任理事

インテリア・デザイン所感

向井正也

近頃〈インテリア〉というコトバは一般用語として、大衆の中に根を下ろしはじめているのは、わが国の造形文化の発展的兆候を示すかのようで、実は、ある一つの危機を暗示するもののようなのである。これは私だけの感じ方かもしれないが、私にとって〈インテリア〉なるコトバは、どうもムード的に、スーパー・マーケットやボーリング場のイメージに結びついて感じられて仕方がない。要するに洋風家具やインテリアは生活文化のごく浅いところで、いつの間にか国民生活に定着してしまっていた、と云ったことにならなしかと危ぶむわけである。事実スーパーの大廉売などによく出ている安テラの家具類など、既にたしかにそのような危機の進展を目のあたりに示しているといえる。一方でそうした現実を眺めつつ、他方で先日のごく72インテリア展のような、立派な家具、インテリアの展示を見ると、ここにも又別の意味で一つの〈危機〉を感じないでは居れない。

前者とちがって、これは、かなり高度な専門的意匠創造の力が大衆の生活とは全く遊離したところで、無目的にムダにつかわれているといった、あるもどかしさ、もの足りなさ、作品がキラビヤカで立派であればある程、私に一種白らけた感じを誘うのである。

先日、関西意匠学会の例会で、樋口治教授の講演：〈'71年の欧米インテリア・デザイン——その苦悩と変貌〉——を聴く機会をもったが、60年代末以降のステューデント・パワーやヒッピー運動の抬頭に反比例するかのような、一般にデザインにおける、オーソドックス正統的モダーンの凋落変貌が北欧諸国やアメリカや日本の、いわゆるバウハウスの教育をうけたデザイナーの心に与える深刻な影響——その脅威と苦悩は見逃し得ないものである。そうした、造形上の一環のマニエリスティックな新しい状況に即応して、新しい道を切り拓いて行こうとする試みが世界の各地の旧世代のデザイナーの間でも、いわば〈年よりの冷水〉式にせいばいの努力を展開しつつあるといえるが、そのようなものが、日本の家具・インテリアの最前線にも何となく見られるようだ。〈'72インテリア展〉でも、やはりそうした要素が残念ながら随所に見られたように思う。

一般的に云って、デザインに関しても造形的創造面での世代のカベは厚くて硬いのである。そうした次第で私は今日の、わが国の家具インテリア界の中堅的指導者層に自重を要望する。変に若返って、ガラにもないヒッピー調の流動ただなき退廃的デザインに浮身をやつすような愚をやめて、もう一度原点に立返って、一人が一代に一つ造れるかどうかわからぬといわれる、本格派的家具デザインに、対象は何にてもあれ、民衆的、日常的な基盤の上で、真剣にとり組んでもらいたいものである。

“SD” 1971—12には、惜しくも、大成途上で自らの命を断った、故剣持勇氏のスナップによるカラー写真の数々が、〈つくり得ぬものへのまなざし〉として戴せられているが、私はこの高名な、わが国のインテリア界の第一線の先頭をつっぱしたデザイナーが、

こうした〈モノ〉〈色とカタチ〉を、彼のデザイン・ソースとして苦心して集めたという事実に、何となく、割れぬものを覚えた。その中で、宮内嘉久氏が述べている、「剣持勇が、…真にものを創る人間として自己の主体を対象化し得たか、といえ、ばくの答えは否定的にならざるを得ない。」という点に関して私も全く同感である。剣持の遺して行った、このカラー・フィルムの数々は、これからの日本のインテリアデザイン教育に一つの示唆をなげかけているように私には思われる。剣持のもったアキレスの踵、それは彼が〈建築〉を建築家と同じ眼で見得なかった処にあるのではないか。私は〈建築〉と〈インテリア・デザイン〉を別のジャンルと考えてはいけないと思う。それは本来的に一本であるべき筈のものなのである。建築家の中には、家具やインテリアに弱い人が居ても仕方がないが、少くとも、インテリア・デザイナーにとっては、建築的空間を十分に把握する能力が必須の要件だと思うのである。そのような方向にインテリアデザインの教育の基本線が一日も早く引かれる事を、スーパー・マーケットやボーリング場などのムードの中で浮び上る〈インテリア〉の消滅と共に、ねがってやまない次第である。

(神戸大学工学部建築学科教授)

服と街とインテリア

岡橋 作太郎

美しい展覧会が御成功でおめでとございます。それにつけても、何んと建築の展覧会のつまらないこと。インテリアをはじめ、絵、彫刻、服装、自動車、すべて美しいものそのものの展示ですが、建築の展示は写真や図面や模型だけです。といって、私はここでインテリアの仕事と建築の仕事との違いとか、その仕事の境界線とか、そんなことを論ずるつもりはありません。また、そんなことが大事なことも思いません。美しい展覧会が羨しいと申上げたいだけです。

服は体に着られるだけでは着られません。つまり袖が二つあって保温力が

あるといったようなことだけでは服とはいえません。ある恰好よさがなければ誰も服とはいいません。

街はどうか、これも、文明国では、服と同じです。但し日本では、車を通すために道を広げ、人を横断させるために歩道橋を作り、電気を通すために電柱を立て電線を蜘蛛の巣のように張りめぐらしたりします。恰好よさなどはどこにもありません。文明国では、電線などは昔からみな地下に埋めてあり、近頃はテレビのアンテナさえ勝手には立てさせない都市のあることも聞いております。

さてインテリアはどうでしょうか。専門家のみなさまの機関誌に今更こんなことを書くのは気がひけますが、これも服と同じであるべきでしょう。しかし日本では、今、街とは反対に、恰好よさに重心がかかりすぎているように私は思います。着やすい、形もくづれない、洗濯もしやすい、値段も手頃といったような要求がインテリアにもやがて、きびしく出されるでしょう、と私は思います。

恰好よさとは何か。これが、ちょっと問題だと思えます。ハイウェイを他の車を追い抜いて走るのが恰好いいと思う人がいます。追い抜きたい車に追い抜かせて美しいマナーでマイペースの走行を楽しむのが恰好いいと思う人もあります。軽四輪でもデラックス型が売れている国があります。2CVのような車が売れている国もあります。

私はインテリアに対する要求がやがて変化するであろうと申しましたが、ほんとうは、もしかすると、変化するのはずっと先のことになるのではないかと考えるのです。というのは、今、仮に、この2CVという車を輸入したとしても日本では売れないであろう、とよくいわれています。私は、これが売れないということは、少くとも、この合理性、この明晰、この爽やかさをよしとする人が少いということ、私を悲観的にします。これは、私に、変化の速度がなかなか加速しないであろうことを思わせ、また変化の内容に限界があることをも感じさせるからです。

恰好よさとは何か、私にとって魅力

ある課題に深入りすることを避け、筆を擱きたいと思えます。美しい薔薇には刺があるからです。

(株式会社設計副社長)

“うちがわからの提案” が示すもの

山家 一千代

私共、日本店舗設計家協会の仲間でもある、東京の中村圭介さんから、態々お招きをいただき乍ら、折角の中村さんの来阪の日には残念乍ら行くことができなくて、閉会の日に、それも時間ギリギリに駆けこんで見学することができた。久し振りに、同窓の岡村さんや、私の最初の職場であった大丸の川崎さんに御説明をいただき乍ら、同じインテリアでも、商業空間の形成を職としてみると、やはり住空間の新しい専門職にうとくなるものだと、会員のみなさんの作品を丹念にみせてもらい乍ら、そう思ったのは、自分の勉強不足からくる視野の狭さからであろう。

総じて作品は、非常に楽しい。過去の機能主義的な、何でもかでも人間の肉体を物理的条件に換置したものから、もっと、人間の情感を大切にしたものであることが、この作品をみての思いであるがそれが、このインテリア展の主張でもあることであった。

然し、この情感の表現ということが単なる手法によって、赤とか青とかに作ることによって可能であるというものでなくて、今日の技術革新の所産であるところの素材であるとか、その工法によって、新しく、システム産業としての方向づけから生れてくる、新しい情感がこれから要求されるものであるにちがいない。それは、過去の単品としての家具の概念からでは到達することができない。距離をもつものであろう。このインテリア展をみて、私は自分が新しい住空間にうと思ったのは、このうごきに気づかなかったことを知ったからであった。

収納壁、収納ユニットの豊口先生、岡村さんの作品、加藤、迎井さんのパネルユニットが、この方向を明らかに指向していることに興味深い思いを持

ったのはそれ故である。既にバス、トイレは開発されて、ホテル、マンションに多くの例をみることができる。

我々の商業空間に於ても、システム産業として可能性を追究すべき時代に入ったようである。ただ問題点は、類型的なパターンが普及すればする程、そのパターンから離脱しようとする宿命を、経営という足かせをもつ商業空間の或る業態ではどうしようもなくもなっている。

住空間では、電気冷蔵庫や、カラーテレビの量産品である機器をもつことによって、或る生活意識の安定感をもつことができるように、新しい住空間のパターンもまた、それを装置する欲望をかきたてるにちがいない。

商業空間は常に心情をゆさぶり欲望を刺激挑発する装置をたくらむことにあるのだが、住空間は、同一パターンの生活の中に、心情の安らぎを見出すことのできる装置であることの相違をもちながら、同じくシステム産業としての方向をたどらなければならない将来をもっているようである。

商業空間では、たとえそれがユニット化されたとしても、いつも同じ表情でいるわけにはゆかない。或る時間の限度をもって変化させてゆかなければならない。特に、ライフサイクルの短い業態では必要である。住空間にとっても、それは、時間の差こそあれ、全く同じことではなからうか。生活の多様化と変化が欲求されてゆくこれからの生活に、或る量産のパターンが投入されてゆくのであるから、当然、そのタイムリーな変化を、どう処理するかが、次の大きな課題となってくるであろう。

住空間とちがって、商業空間は、照明が可成り大きなウエイトをしめる。光の量、光の質、光のニュアンスが可成り大きく演出に役立つ。住空間に於ても光の変化によって、同じパターンのインテリアが全く情緒の異ったものに演出できよう。次のインテリア展では、あの力作の作品に、充分の照明効果を織りこんだ演出を加えてもらって、暮しの情感をもりあげることを教えてほしいものである。

((社)日本店舗設計家協会理事)

一つの狼煙として

鶴岡 英世

日本インテリアデザイナー協会'72 インテリア展は、その主旨にもうたわれている通り、正しい住環境づくりはどうあるべきか、という提案のかたちをとった、まことに意義ある企画と思う。

又これほど多くの問題をかかえたテーマも少なからう。

先づ人間とはいかなるもののかの哲学がそのベースに必要となるし、幸福とは何にかを考えなければならない、デザイナーは、その根底に深い人間愛がなければならぬ。

そうした上での住むと云うことの今日的追求であり、1人の人間、1家族にとって、社会全体にとって、住むとは何にを意味するのか、どんな住まい

方があるのか、今後どのように変化してゆくのか、又その集合体ともいえる都市問題までも合わせて考えなければならなくなってこよう。

環境とはいったい何如にあるべきなのか。人間が憩い、働き、成長する過程にあって、多くの人びとがそこをおとずれ、時間とともに周囲も変化してゆく。このような中で環境といわれるものの実体は何になのか、人びとは環境にどんな期待をよせているのか、単にスペースや空気や音や緑を云ぬんしているだけで良いものなのだろうか。

又そこでの人間形成はどうなるのか。さらに未来社会の人間像どのように考え、子や孫にどのような環境をあたえたら良いのか、次々におこる疑問に対し、私なりに多くの自問自答の機会の得られたことに深く感謝したい。

又貴協会が専門領域の中からの提案

というかたちをとられたことに深い敬意をはらうと同時に、人間環境に対する探求の狼煙として本展が持たれたことに大きな意味をみいだす。

願わくば、今後も継続的事業として回を重ね、周到な準備のもとに精度が上がってゆくことを期待したい。

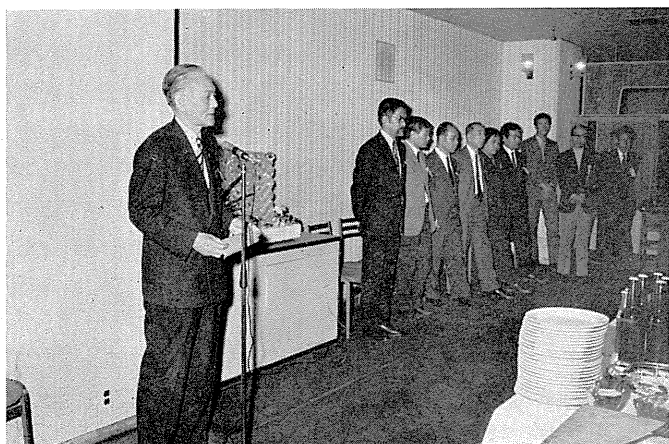
他のデザイン界に於ても、この狼煙を合図に、各専門の立場から提案や意見が数多くだされ、その一つ一つが狼煙となって連鎖反応を呼び、色々な角度から人間とその環境が語られ、形作られてゆくことを願うものである。

((社)日本インダストリアルデザイナー協会理事)

記念パーティ・スナップ

阪神百貨店社長 南部知伸氏 ご挨拶
(財)大阪デザインセンター理事長)

喰う



語る

笑らう



中 村 圭 介

J. I. D. で展覧会をやることは、私達デザイナー集団である以上必要なことだと思います。

だが、出品された物の水準がインテリアデザイナーの水準を示すことにもなりなんだか恐ろしい気もしました。

とにかく、今回は、大阪の皆さんがやられるので、なんとか少しでもお手っだいしなければ、と思って出品しました。

本当に良い展覧会にするには、誰れかが、にくまれ役になって、セレクトする必要がありますと思います。

協会から指名されたデレクター、自由にできるような、会員相互の理解が必要だと思います。

なにか、最初は出品者が少ないというので、私も参加したのですが、尾畑さんの部屋などもっと広く取ってあげれば効果があったのと思いました。

それに、モデルルームの展示という方法は、デパートで金を掛けた展覧会がやられるのでテーマや主張を相当研究し予算もとらないといけないようですね。

大阪の皆さん本当に御苦労さんでした。

南 原 七 郎

'72年作品展の幕を盛大裏に閉じることが出来たことはひとえに皆様の並々な御努力と熱意のたまものと御同慶に存じております。だがわたしなりに今後の作品展の方向の在り方について反省する点もありますので少々私見として述べさせて頂きたいと思います。インテリア界の第一の責任者としての日本インテリアデザイナー協会が協会の名の下に行なう以上現在のわが国のインテリア界の問題点を抽出し、その問題解決に会員の総力を傾け

作品を通じて世に問うという形式を採らないと今後日本のインテリアの発展にプラスとならないのではないかと思います。

例えば、輸入家具が大きく侵入している現状をとらえ、戦後家具デザインの世界的リーダーとしてのアメリカ（ハーマンミラー、ノルを中心とした）、次いで北欧（デンマークを中心とした北欧諸国の家具）、又現在のイタリア等の家具デザインの次に立つ“日本の輸出家具”のデザインを確立するために総力をあげるとか、又“現在のファッション化社会に対処する家具デザインの試み”とか、このような難問は矢張りインテリア界の進歩を考える協会として解決しなければならない重要問題と考えます。

そこに今後テーマをしばられた方がさらに有意義な発展につながるのではないかと考えましたので一言意見をのべてさせていただきます。

松 本 政 雄

作品展がまことに盛況の結果を得たことは甚だ慶しいことでありました。多くの展示の一端に出品したのとして感じた二三のことをあげてみたいと思います。わたしは陶板3種を出品しましたが、それはそれとして今後は全般的には、個々の作品の展示はとりやめて、いくつかのモデルルームの展示に統一し、それも住宅のみでなく、もっと広い範囲に及ぼすべきではないでしょうか。勿論一つの主張、或は高いコーリテーのあることは必要と思いますが、空間の拡りということに、わたしたちが日頃関与していることを、見る人々に一層アピールすることが望ましく思われます。

森 谷 廷 周

'72インテリア 展開催から 2ヶ月 経過、会報によると 6万人余の人々が会

場に出られたとのこと、この数字からはまず予期以上の成果とみてよいと思います。しかし振り返ってみて感ずることは、この作品展を見られた一般の人々がどう受け止めたか、どう感じたか、どう思考したかがわからないことです。特に＜うちがわからの提案＞というサブタイトルと作品内容です。実は参加した私自身も充分消化出来得なかったことなのですが、はたしてそれにふさわしかったかどうか、参加した数人の方々共話合ってみたのですが同様の意見がありました。

ところでそれにも増して一つの企画を実行に移すにあたっての苦勞、特に関西支部実行委員の方々のお骨折には感謝しております。収支予算計画・対外的折衝・会場構成と監理・PR活動・東京側出品者との調整 etc.

私はこの作品展を通じて日頃接触の少ない関西支部会員の方々と接触できたこと、チームワークとコミュニケーションの大切さを改めて認識すると同時に、次の機会にはより多くの会員が参加されるよう望みます。

上 野 忠 之

末だ日本の住宅空間は目的に応じたゆとりのある広さには恵まれず、しかも1フロア形式が段々普遍化され、その空間処理と家具の配置に苦勞の多いことが現実の姿ではないか と思います。特に厨房関係はその機能性のため、種々の機器用具が必要であり、食堂・居間空間との自然なつながりがむづかしくなります。

今回の催しでは、せまい空間の間仕切りとして多用途のある卓子組込みのハッチで、その問題を処理してみようと試みました。

卓子の一方方向への移動により、ハッチであり、食卓であり、配膳台となることをねらい、スペースを有効に使用できるようにしました。

カラーについてはアイボリーを基調として清潔さと、他のカラーとの調和を考えました。

厨房機具には配管スペースをバックステージとして作り（水道・瓦斯など）壁面が出来るだけ簡潔になるよう配慮してみました。

皆様からの、御提言等頂ければ幸いです。

石川 四郎

’72インテリア展（うちがわからの提案）というテーマのもとに、盛会裡に、終って誠に、諸賢とともに、喜び、よかったと思います。

此の展示会成功の要因を探索し、純な気持ちで反省も、また、次の展示会の企画に一步でも前進させる事が必要と考えるから。

此度は、関西支部が主催地となって、企画もしたが、東京本部始め各地区の各会員の協力理解があったために、関西の企画委員の実行に至るまで、協力された結果であったと私は思うのです。私自身何も働かなくて、傍観してた感じで申し訳ないが。

第二には、岡村支部長始め担当の委員の方々の資金勧誘の絶大なる努力とスポンサー、賛助会員の理解ある支援の賜物です。何によりも、活動資金がなくては何も出来ないと云う事、又委員が其の資金を有効適切に使われ無駄とあそびがなくてこそ、スポンサー又社会へ堂々と、アプローチ、PRが出来たと思います。

第三に会場、Dispray をまとめられた富田委員の献身たる活躍は忘れられない。

以上が展示会成功の要因だと私自身は思っています。今日となっているろ反省もし欲も出て思いつきのまま、二三を列記すると

- ①受付は参観者に展示会のリーフレット渡し、入場者に親切な応対と刊行販売の本は出口にも別けること、リーフレットが残ったと聞いている。
- ②会場の流れの在り方に一考あったのでは？出入口が三ヶ所にあった事、却って悪かった西入口は不要と思った、通路のせまい処？
- ③照明が一寸暗らすぎた処があった。

④各出品者のポイントの説明が、余りにも小さくなかったか。今少し出品のねらいポイントを読み易き位置で……。

⑤入口の待合か応接かのセットは、意味がないと思った。休んでる人が邪魔した。現代の参観者のマナー！エチケット！の貧困を見た、年令の差のたわごとか！何わともあれ、社会にアピールするためには、毎年連続的にすることに意味がある。花火線香であってはないと思うが如何、スポンサーも連続的の支援を願う方が、PRになってよいと思いませんかこれは、アンケートでもとって来年に参考にしては……。

加藤 礼三

’72年インテリア展はターミナルの百貨店で開催されたということもあって大変な観衆を動員出来たことは喜ばしいことでありました。

大変残念なことに私自身は今回の催には途中から参加した様なことになって、テーマ選択の討議や、企画面での困難さを素通りしてしまつて、ただ作品を並べるといふ横着な結果になったことを、この紙面をかりて諸先輩にお詫びします。

ただ私が感じました事を申し上げるなら、この様な催しは大変お金のかかることであり、協力企業を如何に説得するかということにかかっていますので、心もとない気がします。勿論個人展と較べれば力関係ではずっと成功率は高いのですが、協会の意図なりを自由に発揮する場である様に、つまり、デザイナーの理想とか、協会の在り方とかは、今後も繰り返し、繰り返し討議したり、反省したりしなければならぬと思います。ただ単に展覧会ということではなく、対外的ななんらかの企画は続けて持ちたいし、実現し、やりとうす実行力が大切だと感じたわけです。

富田 卓司

○創ったものを発表すると云う事

現在の混乱を指摘し、トータルな或いはシンテマチックな住環境を提案することが今の私達デザイナーの社会的

責任である。

最新の科学技術をかき集め、企業拡大・マスプロ・マセセルをやみくもに押し進める産業構造と商業政策が作り出したこの醜・都市・醜い住環境に私達はもうとっくに麻痺症状を起している。ピエール・ポーランが云っている様に本当に必要とされているときにのみ、ものを創るべきであり、何を我々は創るべきか、何に我々は協力すべきか、デザインするパートで我々は対社会的責任を負わされている筈である。日本の民族性、風土、経済、伝統を各自が総合的にとらえ、よりよき日本人の住まいの提案を探り出し、繰り返し、具体的に表現することである。

インテリアデザイナー協会の総意——それが多様な形であっても——を具体的な形で示すことが協会の使命であると私は感じている。個人の発言より集団の発言の方が強く、一回きりよりは回を重ねることが望ましい。各会員がはたすべき対社会的責任の総意が昇華された形となって、はっきりした提案を持ったとき、対社会的にインテリアデザイナー協会は存在する。

○＜うちがわからの提案＞展について

良質の市販品があればコーディネートしてもよい、兎に角トータルな住環境を各自が持ちより、提案しよう、と云う段階であつてみれば、参加者全員の大きな代償にしては成果はたとえ小さくとも、先づはさらけ出したと云う事実が残されたわけである。

問題意識を煮詰めた提案のことばと主張を秘めた熱い出品内容と明晰なDisplayと静かなPR、どれ一つとして、今回の事業が程遠い結果ではあつても、次回の企画に貴重な資料となった事は確かである。貴重な資料をして協会が対社会的な役割を繰り返し行動する事を私は望みます。

並川 拓史

46年度の事業計画は72作品展をメインに傾注し、10周年展（68年度）に次ぐ大きな計画を実行することが目的であった。われわれデザイナー自身の考へべき重要な問題提起として、テーマ、スケール、出品グッズなど、予期以上のものが展開できたと思われます。

しかしながら、個々の出品内容、これらの方向づけなど、どうであった、反省や批判は繰返され、想起される問題など、議論を生む。この残された課題を具体的に追求し解明することが重要だと思われます。また日頃痛感している会員諸氏の協力と盛上りが今ひとつのところ、計画から実施までの実行委員諸氏の決意と努力が、本部、中部支部からの参加が意義深いものがあったと思います。

吉 永 淳

建築工業生産化とインテリア部品の体系化・厨房家具寸法の体系化

住宅の工業生産化は比較的クローズのシステムで行なわれ、それぞれのシステムに応じた標準化が行なわれてきたが最近ではオープンの構成材生産が強調され、個々の寸法でなく体系化された寸法、即ちモデュラー・コーディネーション（MC）の問題が重視されてきた。日本でも住宅産業関連の基準作成に当ってMCの問題が中心課題とされている。

日本の住宅工業生産化は外壁・屋根などシエルター部分を主とし工法もパネル構造でパネルを組立てることにより建築全体を造り上げる方向であった。人工材のパネルで囲まれた人工環境の中での生活は耐えがたいものになってきて、インテリアの役割が重要なものになってきている。

最近では住空間、設備空間を部品として工場で仕上げて工業化を進める方向が発達してきた。アメリカにおけるモービルホームとか アビタ '70 のように住空間がスペースユニット化されたものも出現し従来に増して住空間のシステム化の要求が増大してきた。

昨年2月に建設・通産より発表された住宅産業の基準寸法に関しても生活行動からつめた内側からの住空間のシステム化の提案としては不十分な点が多い、住宅用インテリアモジュール体系化委員会とか収納家具寸法体系化の研究などの情報の伝達。昭和38年頃より開始した学校用家具、その後行なわれた事務用家具 J I S の改訂など公共用家具の標準化などすべて協会員がそれぞれの立場で中心になって行なわれ

てきたことを社会的にアピールするようにインテリア部品体系化に関する情報をパネルで展示した。

家庭用流し台・調理台などが標準化されてユニットされたことにより良質で安価なものが一般家庭に普及し家庭生活に密着したものになった。

成人女性の著しい体位の向上によって J I S の改訂が必要となった。J I S 改訂に関し消費者サイドに立ってデザイン規正の少いような改訂案ができた意義とプロセスを例として協会員の地道な研究が消費者の利益に貢献していることを紹介した。

上 辻 謹 一

大阪地区会員の間で作品展を開きたいという希望が次第に盛り上った、これが具体化して実現するまでには相当の期間があったわけですが、さて具体的な開催場所、内容、経費などが形を整えてきたのは大分時日が経過してからであったように思います。その結果諸種の条件になかった作品の製作期間が圧縮されて大急ぎで時間切れを気にしながら、駆足でやっと間に合ったような結果になってしまいました。いつの場合も同じような経過を辿るのが常のようですが、もう少し腰を落ちつけてじっくり取り組める時間がもう少しあればと思っています。

それにしても今回の大阪展としては大成功の成果を上げ得たものと思いますが、蔭でご苦勞された担当委員の方々のお骨折りには只感謝の念あるのみでございます。

山 口 勇 次 郎

協会が行なう事業のうち、会員の作品展は重要な意義をもつ。今まで大阪だけで行なってきたこの展示会も、第一回よりは今回の第二回で大変な成果があったと思う。内容も“内側からの提案、として出品した会員が“インテリア、をどう考えて家具やテキスタイルなどを取扱っているかを示している。しかしその提案が小さな表示に終って見落し勝であったのは惜しまれる点の一つであった。

この種のディスプレイは大変にむずかしい。僅かな予算での富田氏他の努

力は並々ならぬものがあった、東京側として頭の下るおもいだった。台所をあづかってくれた岡村理事の苦勞も目立たない裏方として、これまた頭の下がるおもいであった。

それらの中で家具展にならないように、あくまで“インテリア展、にしてゆくことの難しさは並大抵のものでなかった筈である。だからこそ作品一つ一つの提案のむづかしさもあったのであろう。としても、会場でこの小さな表示での提案を透かすように読んでくれている人達を見た時は、何かほっとした思いであった。

東京からの出品者の中には予想外の出費で誠に相済まないことになった人もあったが、展示会の終った時点で何とかおさまっていたいたのは担当として厚くお礼を申し上げておくと共にいつかは東京においても開かれるであろう。作品展での尊い出費として役立つことのあることを願って止まない次第である。

協会はどんどんこの種の展示会を開いて自分達の作品なり考えなりを世間の人に知って貰わねばならない。失敗もあり、時には笑われるような事であってもそれはそれなりに会員の糧になる筈である。しりごみすべき時はもう過ぎたようだ。

大阪の方達も次回に向ってまた一歩前進して欲しいし、東京や九州、中部そして北海道の方達にも、作品を通じて世間にアピールする勇氣と努力をつぎこんで欲しい。

岡 村 実

悪循環のきづなで逼塞した環境の中で、住いのありかたは、最悪の条件にさいなまれているのが現状である。これはデザインという隠れ蓑の中で幫助的な役割りをしているデザイナーも、この責の一端を負うべきである。生活機能をも変えんとする強引さは、人間をまもるパッシブな吾々の立場からすれば、否定さるべきではなからうか。

我々の作品展なるものは何れをとるべきか……デザイナーとしてのアクティブな独善性が、プロのみに迎合されるものであってはならない。吾々の手がけるものは常に一般大衆の豊かさに

結びつくものであるべきだと思う。それは普変化したものに現代の秩序を見出し、それを整理し発表することも我々プロの責務の一つである。

今回の作品展は、その点大きな成果があったと思う。「内がわからの提案」なるものが一部の会員のキャンペーンにとどまらず、全会員のものとなることをのぞみます。

最後に、本事業の担当者として、御協力を頂いた各位に厚くお礼を申しますとともに、種々不手際な点で御迷惑をかけたことを深くお詫びします。

本 田 安 治

私は、批判とは反省とは批評についてこれを頭から否定する気はありません。又、賛辞とか建設的意見についても同様です。’72作品展と銘うち協会のエネルギーを結集して一石を投じた事で、種々な波紋がそれを中心に拡がり、やがては消える事でしょう。其等は恐らく、インテリア・デザインの在方とか、デザイナーの姿勢、企画の在方、又一方では行事を意味付ける為の賛辞云々に違いありません。と云うのは、世に繰返される此の種の催しに対

しての反応が文字となって再び世を賑わすのは常に此のパターンを示すからです。その意味で私は“此処にも又”の感概を予測するのです。

此の様な、世に飽きもせず繰返される波紋のパターンは批評する立場の怠慢なのか、或は行為する側の無神経さに依るものなのか、それとも又、崩れる事のないパターンの定石なのでしょうか？

私等は’72作品展を通じ莫大な数の大衆と称ばれる使用者側の関心・無関心振りを体験し、賛助者と云われるメーカー側の人々の考えに接し、又一方出展者は会場設営の労働を共に分かち合いました。私は此等から得たものを’71年度の協会内に於ける消し難い波紋の一つに是非加え度いと思います。

平 井 美 蔓

インテリアデザイン関係の、さまざまに複雑な現実の中の仕事を、デザイナーの自主的なタイトルのもとに、演出し、発表する機会を持つことの意義は、大変大きいものだと思います。企画そのものがすぐれているのに、いい結果が得られないコンペや、タイトル

負けしてしまっている作品の発表展示会等の例が、数少なくない現況の中に、それらの出来、不出来といった簡単な結論とは別に、成果が一つに収斂しないもどかしさを感じます。このもどかしさの中にある状況に、現代の多様さや複雑さが、よみとれるわけです。美術館等を通じての紹介による、この時代を画した20世紀のすぐれたデザイナーによる作品群も、既に確実な商品となりきってしまって、市場に満ちあふれている現在です。科学技術のめざましく、スピーディな進歩にともない、住そのもののあり方を根源的に問いなおされているときの、“うちがわからの提案”は、非常に魅力のあるタイトルであり、又役割として持たねばならない本質的なタイトルでありすぎたと思えます。そして私共は、現実の仕事を通じて、“うちがわからの提案”を宿望ずけられているといえましょう。日々の具体的な仕事のなかにある、いづれはこのタイトルにつながる各種のテーマを、一つの集積としてこの種の企画をうちたてていく意味を感じた次第です。

’72年インテリア展経過報告

今回のインテリア展は関西支部として第3回目の作品展といえる。第1回は36年11月、大阪市の依頼による「シカゴに渡るインテリア展」の内見展示ともいべきものが、(財)大阪デザインハウス(現大阪デザインセンター)に於て、一37年1月シカゴジェトロに於て開催された一第2回は43年11月、当協会の10周年記念事業の一環として、「変動する市民生活と住いの秩序」の統一テーマのもとに百貨店そごうで催された。この2回を通じて、その内容は単品家具類の紹介であった。これについては会員相互より、いろいろと批判をうけたことは勿論であったが、会の創生期としては種々な面で有意義な催であった。

過去2回にわたる作品展を発展させたものが、今回の催の企画となったものである。当初45年度の事業計画とし

て立案されたが、時あたかも Expo の年でその計画も意のままにならず、ただ開催についての会員よりのアンケートの集計に終わった。その過半数の解答により。会期は9、10、11、月、会場は百貨店、内容は家具を主としたトータルインテリア、会員の協賛金は3,000円出品料は5,000円と、その大綱が決められた。46年度事業計画として繰越され、会のキャンペーンとして是非実施すべきだという意見が高まり、企画委員会を編成し、再三におよぶ慎重審議の決果、実施計画にうつり、その準備を進めていった。

当初のプラスチックを主材としたものという主旨を拡大し、新しい構成による現代住環境に即した一般消費者への啓蒙を目的とする催として、「うちがわからの提案」というテーマが決められた。その趣意書は次の如くであ

る。

「’70年代の変革した技術、産業、経済の急激な流れにおしながされた人工環境の渦中において我々は今や人間疎遠という現実と直面しています。人間が真に求めるよりゆたかな生活環境の中で日々をおくり、明日への展開の源をつくるために社会環境の求めるものは高度の技術文化の推進と現実の反省であります。この大きな課題に対して絶え間なく発展する経済活動を背景とした最も身近な環境即ち住空間の構成を社会は切実に希求しております。正しい環境づくりは如何にあるべきかを計画することが我々インテリアデザイナーおよび関連産業の責務と考えその指向を示す一助としてインテリア展の開催を企画しこれが新しい発展への提案となれば幸に存じます。」

その出品内容は作品展のためのデザインより、目下開発中の作品、又は推奨すべき内外の既製品によるコーディ

ネットにより室単位に纏めたデザインをすることにした。この計画は本部理事会の承認と、同時に本部より力強い協力の申し出を得、全国会員に参加のよびかけをすることとなった。46年5月の総会の席上にて、その趣旨、収支予算案、スケジュールの発表がなされた。会期は11月上旬、(大阪国際見本市「インターリビング」展にあわせた)会場は阪神百貨店8階催場(660M²)、予算案次の通り

収入の部

協賛金

30,000円×50口=1,500,000円

会員協賛金

3,000円×60口= 180,000円

出品料

5,000円×40口= 200,000円

本部補助 150,000円

計 2,030,000円

支出の部

会場費及展示費 1,500,000円

印刷、郵送費 200,000円

パーティ及接待費 130,000円

雑費 200,000円

計 2,030,000円

その後、会場の把握が意のままですまず、又景気後退による協賛金の集り等、憂慮すべき多くの点で、スケジュールも遅れ気味であった。然し理事会、総会で承認された以上、是非とも決行という、悲壮感が委員相互の協力を強め、本部にもそれが反映された。当初再度のアンケートによる出品申込者も30名であったが、24名となったのもこの頃であった。会場、会期の決定をみたのは9月上旬であり、協賛金の見通しがほぼたつたのが10月中旬とは、まさに薄氷を渉る感がなきにしもであった。その間、本部理事の率先参加を始め、東京、名古屋地区からの力強い協力により、その具体化が進められていった。

展示内容は「食べる」「憩う」「寝る」の三ブロックに構成され、その分担は各出品者によるチーム作りがなされた。会場のレイアウトも三転、四転の後、決定を見たのは9月の下旬であった。

又一方、協賛会社のPRコーナーとして出品駒の打合せ、印刷物の発行、

大阪府、市、朝日新聞、(財)大阪デザインセンターの後援依頼等、多忙な一日一日が開催日までの余日をせわしく埋めていった。東京からの出品物は協賛会社天童木工の協力により一手搬入となり、26日の開期前々日から徹夜で会場の設営が始まり、27日朝には会場のレイアウトはほぼ完了し、一日中その設営でゴフタ返していた。夕刻には、一年にわたる努力の成果が、ダークグリーンに敷き詰められた敷物、グリーンに濃淡を主調とした背景の中に、調和のとれた、格調の高い姿で浮き出して来たとき、瞬間やレヤレという感慨より、よくもやりおおせたという感激となり。清掃され、花も生けられ明日を待つ会場の中に、今までの緊張を微笑にほころばすものがあつた。

10月28日、うす暗く照明された会場に、オープンと同時に見物客ががめかけ、会期中右往左往させられたのは喜ばしい悲鳴であった。展示品に休息し語り合う若者、子供達の遊び場と、そして母親の観賞、大衆と結びつたこの展示効果は、一応成功しすぎたともいえる。客の中にはメモするもの、熱心に質問する人々、今にして思えばもっと親切な解説が必要であったとも思う。参観者6万人を超えた盛況ぶり、会の存在をして新しい認識を深めたものと思う。学生、若者が40%、婦人が20、専門家、一般人が20%というところだろうか。中にはバイヤーよりの注文、今すぐ欲しいとの希望も多かった。参会者のアンケートの結果として、機能的、デザイン面、色彩、総合的、の項で評判が高く、展示構成も好評であった。毎年開催の希望も数人あり、協会の催を今後通知してくれという希望者が圧倒的であった。又医者の参観者の多かったことも特筆すべきであろう。

28日のオープニングパーティは招待客として阪神百貨店社長南部知伸氏を始め、後援、協賛会社の御歴々、各デザイン界の代表の御歴々。当協会よりはICSIDより帰られて間のない、白石副理事長始め20名余の出席、計90名におよぶ賑々しい会となったことも催のすべりだしに大きな成果を与えたものといえる。

この催を通じて協力して下さった会員諸兄には心よりお礼を申しあげます。特に会場を無料提供して下さい下さった阪神百貨店のかたがた、設営に損徳を度外視して御協力下さった協力会社の皆様には深甚な感謝を致します。又協賛会社の御好意に対して、厚くお礼申しますとともに、御不満の点をお詫びすると同時に、今後の御支援を重ねてお願い申します。反省すべき点は多々ありますが、第一に残念に思うのは支部会員の総力による盛りあがり、いささか欠けていたことです。次回は今回の諸点を参考として、より充実した会員全員の物と是非したい。

出品者

(大阪)浅野正道、石川四郎、上辻謹一、上野忠之、岡村実、尾畑祐司、川崎浩、加藤礼三、富田卓司、並川拓史、新居猛、福岡喜久雄、本田安治、南原七郎、迎井夏樹、山下捷治(準会員)、山口道夫

(東京)豊口克平、中村圭介、森谷延周、山口勇次郎、山岸証史吉永淳、わたなべひろこ

(名古屋)松本政雄、以上24名
収支決算は次のとおりである。

収入の部

協賛金	2,000,000円
	(50社66口)
出品料	179,000円
雑	107,380円
計	2,286,380円

支出の部

会場費	1,205,060円
印刷、郵送費	488,495円
パーティ、接待費	255,040円
交通、人件費	105,040円
会合費	24,210円
雑	192,660円
計	2,270,505円

担当理事	山口勇次郎
	岡村実
企画委員	並川拓史
	富田卓司
	尾畑祐司
	(岡村記)

環境とそのトータルデザイン

白石 勝彦

本稿は、一昨年末、当協会主催のもとに大阪で行なわれたデザインセミナー「環境とそのトータルデザイン— Design 明日の使命」に於ける白石副理事長の基調講演速記から抄録したものである。会報掲載の時期からすればいささか遅きに失するが、内容のもつ意味は、現在新たに検討するべき問題を増々加えて来ていると思われる。旧聞にも拘わらず本号に敢えて採録した理由である。

デザイナーというのは自分の意思表現を形ですと云うのが本業です。言葉だとか文字を媒体としてコミュニケーションするのは非常に苦手でもあり、私の考えておる事が多少なりとも皆様方に通ずるところが有ればいいと思って居ります。

今日のテーマに以下、私の話しがそのままスムーズに入って行けるかどうかは問題です。又簡単に結論の出るものではないと思うので、問題提起の形で私の今迄過去の経験からデザイナーと云うものを体系的に纏めてみた形で御説明し、トータルデザインというものの話を進めて行く叩き台にして頂ければ幸いです。

“ひと。”と“もの。”

此处で“ひと。”と“もの。”との組み合わせという様な言葉を使うのは、最近人間疎外、或は人間不在と云う言葉が盛んに言われて居り、デザインというのは、人間の意思が形になって表現されるという造形活動として大きな力を持って居るわけだけれども、今一度、“ひと。”と“もの。”との関係を考え直してみよう、そういう風な事からトータルデザインをどう形作って行けば良いかについて少し考えて見たいと思うからであります。

先ず、“ひと。”と“もの。”との関係を考える前に“ひと。”とは何を指し、

“もの。”とは何を指して居るのかと云う事の一応の方向づけというか、“ひと。”と“もの。”とを或程度明確にして置く必要があるのではないかと思います。そこで人間疎外とか、人間不在などと最近いわれて居る中で、人間という言葉はどういう風に我々が理解して居るかを考えてみると、いわゆる人間の外面的なものが優先され、内面的なものが欠けて居る、或は忘れ去られて居るという風な解釈が出来るのではないかと、即ち誠実さであるとか、感情であるとか、正義感、或は根性とかいうようなホットの状態よりも、むしろクールな状態が一般的に普遍化されて居るという風に私は感ずるわけです。

そこで私は、人間自身が世界をどうみるか、人間が“もの。”に対してどういう価値を見出すかという価値観、世界観のようなものが此处で大切になって来るのではないかと、そういう状態で、“ひと。”というものを考えてみたいという気がするわけであります。

“ひと。”と“もの。”～“いとなみ。”

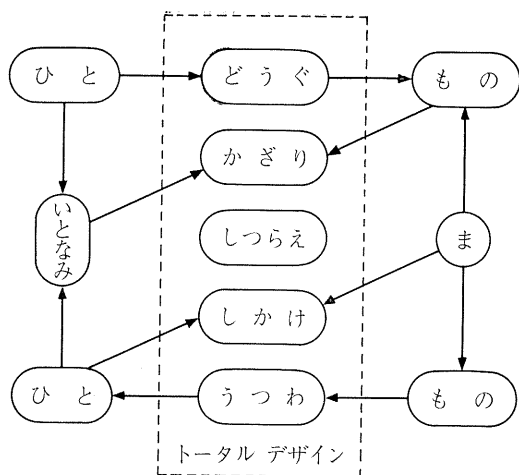
“ひと。”と“もの。”との組み合わせを考える前に、先ず“ひと。”の組み合わせは現在どうなのかという事を考えてみたい。私は“ひと。”と“ひと。”との組み合わせを、一応“いとなみ。”と仮りに呼んで置きます。これは、“ひと。”と“ひと。”の関係に於いて出て来る種々

な問題を指して居るわけで、具体的に“ひと。”というのは男と女であり、それが結合した状態で夫婦があり、その結果として親子が出来る。それが一家族として存在し、家族が幾つか集って親戚があり、そこに然々他人が集って来ると社会が出来る。社会の中では階級が生れたり、国家を形成したり、又国家間に問題が生じたりという風に人間と人間の“いとなみ。”というものは段々と複雑化し、スケールが膨大になって来る、と同時に個人と個人との間、若しくは対国家間に於いても、その“ひと。”と“ひと。”との“いとなみ。”というものが、或る場合には愛であり憎しみ、或は喜びであり、又悲しみ、妬み、慈しみであるという風な、非常に感情的な事から種々な問題が波及して来ます。殺人を犯したり国家間で戦争を起したりする事は、そういう現象的な形だといえます。親子だとか、恋愛関係の男女、或は階級差だとか、国家関係、そういうものから、闘争が生じたりするような事が出て来るわけであります。

そういう“ひと。”と“ひと。”との“いとなみ。”が具体的には風俗、習慣、或は伝統だとか流行を生み、それが大きな社会生活を形成して居るのだと考えられます。しかし、今話した問題に限って言えば、非常に抽象的な事なので我々デザイナーとの組み合わせは余り無いと思います。では何故そういう事を述べたかといえば、今いった風俗、習慣、流行、スタイルといったものが具体的な形になった後の問題に結びついて来るけれども、現状からいうと、それがそのまま形ではないという風に私は考えて居るからであります。

“どうぐ。”

此处で図式について説明しますと、“ひと。”と“ひと。”との間に“いとなみ。”という関係が先ず出て来ます。次に“ひと。”と“もの。”との組み合わせで



何かが存在してくる。この場合“ひと、”から“もの、”に対するアプローチとして“どうぐ、”が生まれる。即ち人間の手の代りとしての“どうぐ、”であります。だからこの場合には人間の行動だとか、人間各部の寸法のような、今迄いわれて来た物理的機能性が問題になって来ます。しかし、生活が段々多様化してくると、そういう人間の行動が直接“もの、”に関係せずに簡略化されて来ます。例えば、今迄ハンドルを廻して居たのがボタンを一つ押すだけに代わるとか、極端な例では、ハンドルを廻したり動かすという力のエネルギーが、単なるサインとしてボタンを押すとか、その時の人間の判断だけで、視覚的にコレコレ2つのものを押す行動といったものだけに代るという風に“どうぐ、”が段々単純化、或は視覚化されるという風に進んで来て居るわけです。今迄の“ひと、”が“もの、”を使うという事が、単なる右か左かという判断力の機械として逆に人間が機械に使われてしまう。人間は判断力を持って居るから、或る程度セレクトするという能力だけが人間に残された最後の能力であると考えた場合には、押すという事だけで人間は機械の一部になってしまうという感じもしないではない訳です。その辺りがこれからの問題となるのではないかと思います。

“ま、”

次に“もの、”と“もの、”との間に何が存在するか、これも“ひと、”と“ひと、”と同じように両方の間に“ま、”というか、空間的な問題が出て来ます。“ま、”という言葉を取って使った

のは、“もの、”と“もの、”との間、空間というのが今迄インテリアでいうと天井と床、壁と壁の間、又都市の構成でいうと建築と建築との間とか、都市と都市との間という形で、どうしても、ポジティブなもの、物の材質とか色とか、若しくは建物という一つの実在的な、ポジティブなボリュームに目が行って、間のネガティブなものに対する感覚がありません。日本人の中にはそういう感覚が過去に有ったのが、現在ではそれが段々にすたれつつあるように私は思うからです。

そういうネガティブなボリュームに対する無関心な状態を振返り、何とか此処でこの事に関心を向ける状態を復活したいという気持ちがある、と同時にこの“ま、”というのは人間の“いとなみ、”を入れる一つの“うつわ、”に近くなって来るわけですから、全ての“ま、”というものが本当に人間が動き廻る空間、場所としての必要性を持つと考えねばならぬのではないかと思います。

“うつわ、”

此度は“どうぐ、”とは反対に“もの、”と“ひと、”との関係で、逆に“もの、”から“ひと、”に対するアプローチとしてその間に“うつわ、”が有りま。

“うつわ、”とは、大は国家から都市、建築、小は単に“もの、”を入れる為の容器、家具では簞笥のようなものまで含めて“もの、”と“ひと、”との関係で囲まれる、人間としてはネガティブな状態を一応“うつわ、”として考えるわけです。この場合にどういう事が行なわれていくかといえば、“もの、”と“ひ

と、”との関係で、一方では環境への順応、他方で、環境に押えつけられた形で人間が小さくなって行くという風な、人間から外に拡がる問題と、外から人間の中に集約的に入って来る問題とが出て来るのではないかと思います。

デザインの輪

此処で一応、ひと—どうぐ—もの—ま—もの—うつわ—ひと—いとなみ—ひと、という循環の輪が出来ます。今迄のデザインに対する一般的な考え方としては、こういう輪の中で、プロダクトデザイン、インテリアデザイン、建築デザイン、といったようなデザインの各ジャンルが各々分轄出来るとしています。しかし、これから私の話す問題はむしろ我々がこれから考えなければならぬ問題だと思いますが、その一つとして、此度はこの“いとなみ、”と“もの、”とを結付ける社会だとか流行など人間生活の種々な現象を具体的に“もの、”でどう解決して行くかという事で、今迄我々がいわゆる“どうぐ、”を作ったり、プロダクトデザインで家具をつくったり、IDで機械や器具を作るような状態を各ジャンルと考えて居たのが実際にはこういう生活の“いとなみ、”という抽象的な問題と“もの、”とをどう結付けるかという事は、我々、3次元、立体的なデザインをして居る者にとっては握み様が無かった。そこでそれを結付けたものを“かざり、”という行為で考えてみたいと私は思います。

“かざり、”

これはいわゆる造形の中で、見せるという要素、我々の生活の種々な現象を具体的な“もの、”で表現する、例えば生活の中のルールを形で表現する記号的なもの、交通標識のようなもの、或は、或る“もの、”を形造って、それを象徴的なサイン、シンボルのようなものを含む視覚的要素の多いものを、今迄述べたような考え方で把えて見たらどうかと思うわけです。現在これが、見せるという良い意味での使い方から段々に見せ掛け、虚像、虚構というか、何かそれらしく見せるという風な方向に墮落しつつあるような気が致します。しかし、或る意味ではそうい

う視覚的表現は、装飾とかディスプレイの表現として個性化し、というよりも個性的、主観的な表現が、今後相当強くなって来ると考えられ、例えば人間の心理機能を充足する為の一つの仕事となるのではないかとと思われるわけです。

“しかけ、”

これと同じような事を対照的に考えますと、此度は“ま、”と“ひと、”との拘り合いです。これを私は“しかけ、”と呼びます。空間と人間を適応させる為の種々な設備とか装置というものを含んだもので、“かざり、”に文化的な意味が有るとすれば、“しかけ、”は文明的な意味があるというか、科学技術に依って支えられて居るものと考えて良いと思います。又一方が非常に主観的であれば、こちらは非常に客観的であり、機能的に考えると片方は心理機能であるのに対して、こちらは物理機能を満足させる為の装置であり“しかけ、”であると考えられます。此の根底にはエンジニアリングに対する信頼感があるわけですが現在ではこの技術に対するやや必要以上の過信が行なわれて居る為、ややもすると公害といった方向に進むのではないか、その方向が進むと人間がいわゆる環境に順応させられ、段々ロボット化し、温室育ちに落入って行く状態が現象として出て来るとのではないかという気が致します。

“しつらえ、”

又、“ま、”と“いとなみ、”というのは双方共、抽象的過ぎて結びつきませんし、逆に“どうぐ、”と“うつわ、”に関しても、これを直接結びつける事はないのではないかと思います。強い“かざり、”と“しかけ、”の両方を結びつけると、此の間に“しつらえ、”といわれる言葉が出て来るとのではないかと思います。以上が私の考えた“ひと、”と“もの、”との拘り合いを図式で表現したものだとお考え頂いていいと思います。

“もの、”に対する人間の行動

この図式の中で何をトータルデザインというか、環境を作り出す為に必要な人間の創造的な行為をトータルなものとしてどのように考えたらよいかという事で、一應私は図式をタテに割っ

た“どうぐ、”を作る事、“かざり、”着けをする事、“しかけ、”を作る事、“うつわ、”を作る事、という真中の部分をつくり出して、具体的な“もの、”にする人間の行動を一應デザインという風に把握していった場合に、トータルデザインというものの各々の位置、或は関係などが此处でやや浮彫りにされたのではないかという気がして居るわけであります。

以上ではぼろ大まかなアウトラインが出ましたので、これから各々についての過去の種々な状態、これからの問題点を少しづつ指適し、我々が如何にしなければならぬかという事で話を進めて行きたいと思います。

外面的なものから内面的に

先ず“ひと、”自身については種々な問題がまだ整理されて居ませんが、先程述べたように外面的な容貌、或は着ている物等表面的、視覚的な面は非常に具体性を持っている為に信頼感がもたれ、内面的にはあまり突込む事なく表面的なものだけで判断するという習慣が徐々に多くなって来るとそういう人間に対する一般的な概念というものが育ってきて、強烈な個性を持つ人等は住み難くなる状態がくるような気がします。そして、これ等が極限に達すると、そこで種々な問題が出て来ます。例えば先の三島由紀夫事件のような、はみ出してくる人等が出たり、自殺者が増えるような現象、つまり個性の強い人等がその個性化を圧迫されたばかりに前述のような形が出てくるような気がします。人と人との営みの社会に於いて、愛とか憎しみといった問題が極限に達すると、そこで闘争の形が強くなり、それを具体的な形で現わす我々デザイン活動の中にもそのような問題が非常に特殊な形になって現われて来ます。例えば企業間に於ける利益追求の為の競争が極限に達する事に依って、実際に我々使う側の人間がその戦いの中で犠牲になるというような事が起って来るとのではないかという気が致します。

マスコミからミニコミ

それと共に、“ひと、”と“ひと、”との拘り合い“いとなみ、”に必要なお互いの意思を疎通させるコミュニケーション

の媒体が段々複雑化して来て、今迄単なる言葉で、或いは文字であったのが、視覚言語というか、造形的、抽象的な型で言語が伝えられたり、又音楽のように非常に聴覚的、或いは時間的共通性の言葉で伝えられるという風な事で非常に複雑なコミュニケーションが行なわれて来るようになるのではないかと思います。そこで当然そういう事が単純化されつつ徐々に対象が大きくなり、いわゆるマスコミュニケーションになって来る場合には、その媒体を通ずる表現が非常に客観的なものとなり、誰にでもわかるような表現になって来る傾向が強まるのではないかと思います。然しそれに対する反動として、ミニコミュニケーションという非常に少量な伝達手段というものが出て来始めており、先の客観的表現でなく、逆に非常に主観的な表現で行なわれ、非常に小さな範囲だけで満足するコミュニケーションという事も出て来ると思います。

デザイナーの役割り

我々はそういうコミュニケーションの中に於けるデザイナーの立場を考えてみなければなりません。即ち、我々は作る立場、それを使う立場というような供給と需要の関係で、その間に入り或る場合は消費者の意見を代表するオピニオンリーダーの役割を果たさなければならぬし、或る場合には消費者の立場で非常に多様化された情報、インフォメーションを整理するアドバイザーとして、又コンサルタントとしての形での役割りが今後デザイナーのトータルな仕事の中で相当増えてくるのではないかという感じがするわけです。そこで共通の言葉としてのサイン、記号、シンボルというものが我々の中で重要な位置を占めて来た場合に、デザイナーはどういう行動をとらねばならぬかという事が考えられるようになると思います。

人間性の喪失

“もの、”と“もの、”との関係については先程少し話しましたが“どうぐ、”が段々発達し、いわゆる手を動かすとか、力を出して“もの、”を作り出した後何か行動するという事から人間が段々と遠ざかり、怠惰になって来る。な

るべく少ないエネルギーで最も効率を上げるというような状態になって、これが人の持つ肉体的な能力（機械的な能力ではなくて）というものが非常に極端な状態で出て来ます。例えばスポーツ選手に於いてみられる状態、即ち自分は行動に参加しないで、特殊な目的の為に訓練された人間が参加している競技を観る事に対して興味を持つというような非常に客観的な状態が出てくる。その中に居ながら自分自身は参加しないというような状態が出るという事は、頭でつかちになってしまい、行動が伴わないという社会が出て来るのではないかと、デザイナーとして非常に危惧を感じるわけです。

価値観の変化

“もの。”と“もの。”との掛け合いについてこれ以上述べる必要はないと思うが、いわゆる本当の価値というか、正しい価値の評価がされる質の高いものが今後段々と望まれて来るのではないかと考えます。この価値を高めるといふ事は、新しい形を“もの。”に与えるといふか、一般的に言えば付加価値を高めるといふ事で、これがこれからのデザイナーの中で非常に大きな役割りを占める事になるでしょう。“いとなみ。”の中で出て来る種々な問題を越えて例えば価格の安いものが商品的に価値が有るといふ今迄の一つの考え方等、そういう事だけではなくて、商品性を上げる為の問題として質がもっと高く重んじられる状態の来る事が我々にとって最も望ましいと思います。

爛熟期から反動へ

“いとなみ。”と“もの。”との関係では、現在経済的な繁栄が、具体的な形では非常にオーバードコレーションといふか装飾過多の傾向を強くして居ると思います。生活の実態に伴わず、その面だけが非常に昂揚されている。然しいずれはこれが爛熟期に入って又、元へ戻るという事が考えられるのではないかと。丁度ロココのような状態が漸次ピークを迎え、華やかであるといふ事のみが心理的機能ではなくて、別の意味での反動的な心理的機能が要求されてくるのではないかとこの気が致します。

細分化の掛け橋

それから“ま。”と“ひと。”との間の“しかけ。”の状態では出て来る物質文明に対する問題については今更申し上げる必要はないと思います。我々の身の廻りにある全てのものは、科学技術の発達に依って出て来るメリットと、それに依るマイナス面とのバランスの上で、そのマイナス面が段々多くなって居る事は実感として我々が味合っております。その辺の問題がこれからの大きな焦点となって来ると思います。こういう考え方で我々の身の廻りを今一度見直した時、結果的に人間というもの、その中でどういう役割りを果たさなければならないか、而もデザイナーは実際にどういう掛け合いのある“もの。”を作り出す人間として、又そういう“もの。”と“もの。”との掛け橋、“ひと。”と“もの。”との掛け橋、
“いとなみ。”と“もの。”との掛け橋的な役割りを果たして居る人間として、どういう風な使命を持ち、又社会に対してどのように責任を果たさなければならないかという事がこれから問題になるであらう。

各ジャンルの交流

現在は、細分化されたデザイナーのジャンルがあって、夫々の中で我々は自分の志向して居る方向が本当に正しい方向なのかどうか、他のジャンルとの関係で、それがどういう位置にあって仕事をして居るのだろうか、という事とは関係なしに自分のジャンルの方向だけを志向して進んで居るわけですが、このジャンルとジャンルとの間の交流がこれからはもっと必要だと思いますし、又必要に応じて、違うジャンルの人等が集りプロジェクトチームを作り、一つの目標に向かって進むという方向も必要だと思います。そういう意味ではデザイナーの持つ個性というものがどの程度に維持出来るか非常に危ぶみます。無名性という事が此処で問題になって来るかもしれませんが、最終的にはデザイナーというものは非常に孤独な、非常にプライベートな仕事をしなければならぬという意味で、或る程度の個性化という事にもなってくる。又作家という立場の仕事も必要になって来ると思います。

個性が出る環境を

そういう意味では先程の“ひと。”と“ひと。”との“いとなみ。”の中で出て来るような、例えば言語の違い、種族、人種の違い、国と国との違いという事からこの“いとなみ。”という事が段々難かしくなって来るような気が致します。しかし我々が万博で感じた事は、言語の違い、しかも風俗習慣の違いはあっても、基本的に考えて居る事は人間である以上あまり変りがない。あれはナショナルリティといふか、夫々の国が、国という意識をはっきりさせた上で沢山集まる事に依って意味があるので、万博が国際的な催しだといふ事でそれぞれ共通の品種や形を現すようなものであったら私は万博の意味はないと思います。それぞれの国の持つ個性というものが強烈に出ていて、それが一堂に集まってこそ始めて国際的催し物の意味がある。そういう意味からすると我々が国際社会に出て種々な仕事をするような環境の中でも、あくまで国家というものを風俗習慣というものを意識しながら行動を起こすと同時に、個人個人も、そういう交流の中で、それぞれのジャンルの特性なり個性を生かして行きながら互いに共通点を見出し、基本的な考え方を話し合い、最終的な結論を出す時にはその人の個性が出るような環境をこれから作って行くべきではないかと思っています。大体以上が私のお話ししたかった事柄でございます。

(副理事長)

(同稿文責 本田安治)

委員長会議の設定とその意義

先の事務局ニュース（No. 24. 46年12月号）に報告されておりました“委員長会議”について、ここに、その性格と位置づけなどにふれておきます。

従来、とかく理事会と委員会との全体的なつながりがなく、一應担当理事を通して行なわれていました。ここで、これらのパイプを太く確実にするために両者の連絡会議的なものとして委員長会議（理事会側の出席者を含む）の設定がきまり、第1回の関東のみの打合せ会が昨年11月24日に開かれました。

ここに、委員長会議の詳細な議題内容を整理し報告いたします。

新しい企画を理事会にもちあげるために、各委員会に提出されたものなどをとりあげる。一種の諮問機能的な性格をもたせる。企画委員会は有名無実にちかいこと。

会議の開催は、理事会のひらかれない奇数月にもつこと。

協会のメリットとしての具体的な割引き制度については、創立当初の会の主旨と今日の実状とは多少のちがいがあること。たとえば、会員資格の多様化。ために、今後、大いに検討を要することであろう。また、現在、生活互助会的なシステムが研究されている。

“インテリアデザイナー憲章”と呼ばれるものも、単につくるのではなくて若い世代が社会で活動する場合の無言の誇りと責任感をもたせるバックアップ的なものとして利するものではないだろうか。たとえば、応接間に額入りとしておくなど。同様に、バッヂや標札なども考えてもよいだろうと。

また、“研究発表会”も、何も肩をいからせず、パドック的に研究の調教場的な軽い気持で意見を交換できる場としてゆくのがよいのではないだろうか。名称にしても変えてもさしつかえ

ないのではないのかと。

また、今日、インテリアデザインの分野でジャーナリズムに登場している人々を大いに勧誘し入会してもらうことはどうか。

など、具体的な実質的なテーマがとりあげられ、これら会議の必要性が痛感されました。

その他、月例会（11月22日）や見学会（12月11日）については次号なりで報告させていただきます。

（東京支部 尾上孝一）

中部支部の今後

昨年中部支部が設けられてこの一年が何か追かけられているような感慨のうちに過ぎていこうとしている。

新しい年に何をなすべきか、具体的にいってその一番の要点になると思うことは支部会員がその地方に於て行なう仕事ができるだけやり易くなる方法を考えていくことではないかと思う。

そのためにはいろいろなことを押進めていく必要があろうが、それには支部会員が結束していくことは大切なことであろう。これはひいては協会自体の発展に結びつくことである。そして会員一人一人の要望を十分にとり入れていくように考えなければなるまい。それが基盤となって協会の社会的拡りが求められることになる。何れにしても今日から明日の世界を目指してその歩みは遅々としていても着実の中に新しい視野を求めていきたいと考えている。

（中部支部 松本政雄）

九州支部近況

1月8日夕方6時から坂本宅で天野・後藤・中村(忠)・菊竹・白川・石松計7人が集り、支部一年の不活発の反省、役員選挙のあり方、今後の行事等

について座談会、新年宴会を行なう。連絡が直前であったため、出席者が少なかった。近い時期に再度集って総会を行ない、来年度の事業計画の立案をすることにしたが、本年度の事業は講演会又は見学会を行う案が出たので、今後準備を進めることになった。色々とは話は出たが要は忙しくても出来るだけ集る機会を度々持つこと。会員を多くすることが何よりということ。九州独自のメリットを作り上げることが肝要ということで本年からの心構えを新たに終った。

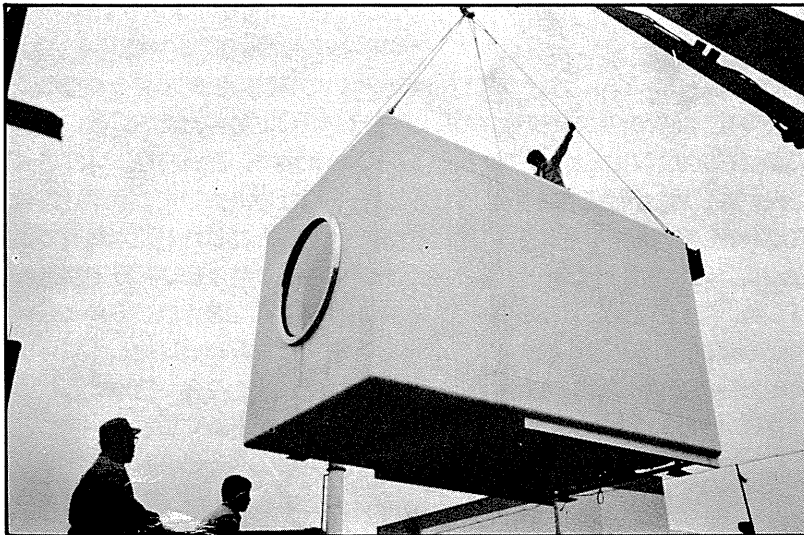
（九州支部 坂本康夫）

関西支部 '72年に期す

作品展の企画に終始した'71年度のしめくくりとして、12月11日京都で見学会を催した。有芳園一住友家古銅器博物館一の見学をかね、永観堂、南禅寺と冬の冷い雨の中の散策、参加者18名、3000年の昔、殷、周の時代を始めとして集められた古銅器の数々は、世界的コレクションにふさわしく、春秋の変遷をきざんだいぶかしいブロンズの輝が印象的であった。又東山のただづまいは我々にとっても一つのよりどころとなった。最後に東山会館にて、鍋を囲んでの忘年会は、作品展を回顧して支部の建設的な意見により、交歓をもちえたことは有意義であった。これを機会に会員相互の理解と協力により、その運営を一層力強いものとしてゆきたい。

今回、新たに、加藤 礼三（セキスイ）、山口道夫（ドムス）向井周二（フリー）の三氏の入会により、脱マンネリの新風に大いなる活躍を期待してやみません。間もなく、次年度を迎えます、新しい息吹の結集による支部の体質改善を是非、可能なものとしたい。諸兄の革新的な御意見をお聞かせ願います。（関西支部 岡村実）

賛助会員紹介



CAPSULE 取付中!!



DAIMARU
DESIGN

&
ENGINEERING
DIVISION

OSAKA · TOKYO · NAGOYA · FUKUOKA

TOYOBO

東洋紡じゅうたん 東洋紡カーテン 東洋紡壁張り

ti 東洋紡インテリア株式会社

本社 大阪市北区梅ヶ枝町108(新梅ヶ枝ビル2階) TEL (361) 9771

東京支店 東京都江東区社丹2丁目1番8号東京倉庫ビル3階	TEL (03) (642) 9510	長野営業所 松本市双葉町2-8-73の2	TEL (02634) (2) 8661
大阪営業所 大阪市北区菅栄町1-19の1	TEL (06) (358) 6143	札幌営業所 札幌市水車町8丁目6-5-7	TEL (0122) (81) 2523
名古屋営業所 名古屋市熱田区白鳥町7-0の1(近代ビル)	TEL (052) (681) 6621	岡山出張所 岡山市今村字六反田1-4-3の2	TEL (0862) (41) 3850
松山営業所 松山市歩行町1丁目6の10	TEL (0899) (31) 3086	静岡出張所 静岡市西脇9-1-3	TEL (0542) (85) 0389
北陸営業所 富山市丸の内2丁目1番7号	TEL (0764) (41) 7596	秋田東洋紡インテリア販売(株)	
福岡営業所 福岡市宮松町1-7の1	TEL (092) (64) 4209	秋田市南通築地2番2-1号	TEL (0188) (33) 3760
広島営業所 広島市中広町1丁目12番18号	TEL (0822) (32) 7139	仙台東洋紡インテリア販売(株)	
大宮営業所 大宮市島根字下根切2-0-6	TEL (0486) (24) 4356	仙台市卸町2丁目2'の1	TEL (0222) (94) 2096
横浜営業所 横浜市南区宿町2丁目250	TEL (045) (710) 5551~2	守口配送センター 守口市東郷通3丁目39の2	TEL (06) (96) 1181~5

編集後記

編集者のむずかしさは、原稿をいかに期日通りにあつめるかにかかっているようです。72展特集号ということで将来の資料としても残すような立派なものにすべくハリキったわけです。

ゲストの声として5名、参加した会員から15名、20名の原稿をあつめるの

は、ともかく大変なことでした。せっかく立派な展覧会ができたのだからその報告と記録を兼ねて、締めくくりといたく、原稿がくるまで、気永に待った結果、東京に2号分の発行の先行をお願いした次第です。

白石さんの論説は45年末の事業のセミナーの基調講演を、本田氏の手をわずらはして、抄録したのですが、公

害、その他環境の問題、又各デザインのジャンルを越えた、トータルなデザインの指向等、今日的な問題としてあらためて、採りあげたわけです、氏一流の明解な論旨が図表で一目瞭然にあらわされています。

尚作品写真中52号に出ました、森谷延周、わたなべひろこさんの分は割愛しました。(川崎記)

機関誌・J I D Vol. 13 13 No. 55 定価 200円
昭和47年3月発行 印刷 ナニワ印刷株
発行所 社団法人 日本インテリアデザイナー協会
(☎ 150) 東京都渋谷区神宮前1-14-34 森ビル
振替・東京・76389番 電話 (03) 403-6647
The Japan Designers Association

発行人・豊口克平 編集 社団法人 日本インテリアデザイナー協会 会報委員会
担当理事 泉修二・川崎浩●三宅征郎・田中聡行・鈴木栄二・織田武己・矢田秀治・秋山修治
委員長(関東)尾上孝一●真水公雅・山田伊三郎・加藤昴子・大広保子・山岸征史・佐戸川清
(関西) ●南原七郎・常持敦・本田安治 遠藤誠之
(中部)林 寅 正●八代美代子・若園 晃・宇賀敏雄・安藤 清
Mori-Bldg., 14-34, 1-chome, Jingumae Shibuya-ku, Tokyo, Japan.